ラテン
アメリカの
文学
15

亡き王子のためのハバーナ

カブレラ=インファンテ

木村榮一 訳

集英社

ラテンアメリカの文学 *15*　　ISBN 4-08-126015-X

亡き王子のためのハバーナ

木村榮一訳

LA HABANA PARA UN INFANTE DIFUNTO
by Guillermo Cabrera Infante
Copyright © 1979 by G. Cabrera Infante
Japanese translation rights arranged with
G. Cabrera Infante, London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

1983年12月15日第1刷発行

編　集　株式会社　綜合社
101　東京都千代田区神田神保町3—6—5
電話　03（239）3811
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
101　東京都千代田区一ツ橋2—5—10
電話　出版部 03（238）2842
販売部 03（230）6171
印刷所　中央精版印刷株式会社
株式会社美松堂印刷所

落丁・乱丁本はお取り替えいたします　　© 1983 Shueisha

ISBN4-08-126015-X C0397

目次

亡き王子のためのハバーナ　木村榮一訳　3
解説　木村榮一　577
著作年譜　589

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

亡き王子のためのハバーナ

ぼくの動機になってくれたMに

カール・デナム（原住民たちをゆっくり見廻したあと）
「このあたりにはブロンドがあまりいないようだな」
『キング・コング』

主要登場人物

ぼく　本篇の主人公。田舎町から首都ハバーナに引っ越し、様々な男女と知りあい、様々な愛を知ってゆく。

父　ガチガチの堅物。筋金入りの共産党員。

母　好奇心旺盛な女性。〈ぼく〉にあらゆる知識への道を開いてくれる。

エロイ・サントス　父の友人で共産党員。おさない〈ぼく〉に大人の世界を垣間見させてくれる。

シルビオ・リゴール　〈ぼく〉の中学時代の悪友。

ヘルマン・プイグ　シネ・クラブ創設時の映画仲間。

フリエータ　女優志望の女性。この恋は成就しなかった。

ビルヒニア　〈ぼく〉が初めて知ることになる女性。

変容の館

ぼくは、ぼくたちはそこの階段を昇りながら、なんと立派な階段だろうと思った。じつを言うと、ぼくはまだ一度も階段を昇ったことがなかったのだ。それまで住んでいた田舎町には二階建て以上の建物が数えるほどしかなく、当然のことながら、そういう家はぼくのような子供を中に入れてはくれなかった。そのせいで、ハバーナにまつわる最初の思い出といえば、まっさきに大理石の踏み段のついたあの階段を思い出す。バスの停留所や正面に市場の見える蒸気広場のことも憶えてはいるが、田舎町にあるお屋敷のポーチを見慣れていたぼくには、無数の柱がアーケードを支えている建物など珍しくもなんともなかった。また、街を歩いていて見かけた石造りの建物と手入れの行き届いた庭も記憶に残っているが、後になってそれがもうひとつの停留所、つまり警官の停留所、警察署だから、あまり近づかないほうがいいと聞かされたので、以来あの建物のことは忘れることにしている。したがって、ハバーナの最初の思い出といえば、今でもあの豪華な階段が思い浮かんでくる。二階はひどくうす暗くて、中の様子はまったく分らず、踊り場の先にうねうね続いている階段しか眼に入らなかった。螺旋階段をさらに進んで三階に出ると、どこからともなく差し込む奇妙な藤色の光に包まれて異様な光景が浮かび上がった（驚いたことに、家族の者はどこかに姿を消していた）。ぼくの前には長い通路が、今まで見たこともないような狭いトンネルを思わせる長い廊下が伸びていた。ずらっと並んだ部屋のドアはすべて開け放たれ、中が見えないようにカーテンがかかっていた。色とりどりのカーテンの上と下には、それぞれ細長い隙間と小さな隙間ができていて、風に揺れていたが、部屋の中までは見えなかった。季節は真夏だったが、朝が早かったせいか、建物の奥から涼しい風が吹いていた。その光景を前にしたとたんに、時間がぴたりと静止した。スルエータ街四〇八番地と記されたあの建物の中に踏み込んだ瞬間に、ぼくは自分の人生の新しい第一歩を大きく踏み出した、つまり幼年時代がそこで終わりを告げて、新たに思春期が始まったのだ。自分の思春期についてあれこれ喋ったり、懐しそうに思い出したり、ものを書いたりする人は大勢いるだろうが、何年何月何日にそれが始まったかを正確に憶えている人はまずいないだろう。幼年時代が長く続きすぎたために思春期がひどく短くなったり、その逆だったりして、たいていの人は思春期がいつ始まったかを憶えていないものだが、ぼくには

それがよく分っている。一九四一年七月二十五日、その日にぼくの思春期が始まった。当時はまだ多分に子供っぽいところが残っていたが、それでもあの日、あの朝、カーテンのかかっている長い廊下の前に立って建物の内部を眺めたあの瞬間に、ぼくの思春期が始まったことはまちがいない。ずっと後のことになるが、独学で画家になったチェマ・ブエがあのアパートにやってきたことがある。彼は〈貸間あり――数日間なら無料の部屋もあります〉と書いた貼り紙の見える、ぞっとするような玄関を通って中に入ってきた。長年気随気儘なボヘミアン生活を送ってきたあの男でさえ、ぶっこわれた蜂の巣を思わせる建物の内部をひと目見たとたんに怖気をふるい、こんなところには片時もいたくないといって後も見ずに逃げ出していった。それはともかく、あの記念すべき日にぼくの幼年時代は終わりを告げた。ぼくたちが住むようになった豪邸はハバーナの貧民収容所のようなところだったが、そこに足を踏み入れたとたんに、ああ、いよいよぼくはここで教育を受けることになるんだなと考えた（豪邸という言葉はその時初めて耳にしたが、ほかのいろいろなことと同様その言葉もいつの間にか覚えてしまった。ハバーナではぼくの育った町とちがう言葉が話されていたが、貧しい人たちはそれとはまた全然別の言葉を用いていたので、まるで外国へでも来たような感じがした。そのうち豪邸という言葉の意味を教えてもらったが、これは豪壮な邸宅をつづめたもので、昔は立派なお屋敷だった建物が老朽化して貧民のアパートに変ったものを指している）。

ぼくたちはひと塊になって、おそるおそるその長い廊下を先へ進んだ。やがて、そこだけが閉め切られた一枚のドアの前に出たが、もう一本の長い廊下の真向いにあるそのドアがこれからしばらく仮住まいすることになる部屋だった（建物の内部は背の高いT字形に線をもう一本加えたような形をしていて、左手に続き部屋のようなものが見えた。やがて分ったところでは、そこが共同のバスルームと無臭トイレになっており、これがのちにぼくに害をなすことになる）。その部屋を借りていた同じ町出身の一家が夏の間一時帰郷することになったが、その話をどこからか聞き込んできたおふくろが先方とかけ合って、ひと月間その部屋を貸してもらうことにしたのだ。おやじ（実際にドアを開けたのはおふくろだったと思う）がドアを開けたとたんに、何とも言えない異臭が鼻をついた。以来その臭いを嗅ぐたびに、あの部屋とそこで暮らしていた一家のことを思い出すようになった。あの一家は田舎町に大きな屋敷を構えていて、そこでよく共産党の集会が開かれた。ぼくたちはちょくちょくその会合に顔を出したが、その時はあの臭いが少しもしなかった。ところがハバーナでは得体の知れない奇妙なパウダーを使っていたらしくて、おふくろが調べたところではそれがあの異臭の原因になっていた。そう言えば、初めて寝た娼婦の香水も似たような匂いがした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

が、あれはおそらくハバーナ特有の匂いなのだろう。もっとも娼婦の香水は禁じられた行為を思わせるだけに快く刺激的な香りだったが、その部屋の忘れようのない臭いのほうはぞっとするほど不快な悪臭——人を寄せつけない腐臭としかいいようのない代物だった。しかし、このふたつの匂いはぼくにとって思春期の始まりを告げる匂いでもあった。言ってみればあれは、二度とくり返したいとは思わないが、数々の思い出を秘めた青春の一時期、すなわち思春期の匂いだったのだ。

ぼくたちは異臭の漂う乱雑に取り散らかった部屋に荷物（といっても、ダンボール箱に紐をかけただけのものだが）をおろしてひと息入れたが、生来きれい好きのおふくろはすぐさま散らかった部屋の片付けを始めた。あの部屋ではひと月間暮らしたが、終日家の前を行き交っていた市電のことは今でもよく憶えている（それまで市電など見たことがなかったので、ぼくはその乗物にすっかり魅せられてしまった。ぴかぴか光っているレールの上をがたごと走っていく市電、どこかで雨ざらしになっていたような車体、線路と平行して走っている二本のケーブルに接触すると、ベンガル花火のようにパチパチ火花を出す長いアンテナ）。昼の間はそうしたものをうっとり眺め、夜は夜で、ぼくたちのバルコニーのすぐ横に取りつけてある赤と青のネオンサインに見惚れたものだった。ネオンサインはチカチカ瞬きながら〈薬剤店サラー〉、〈卸売り〉という文字を交互に浮かび上がらせていた。ネオンで麗々しく宣伝しているサラーという男は、一介の薬剤師から身を起こして薬の卸売りの店を構えるようになった成り上がり者で、今では事業を手広くやりながら、資産をごっそり貯めこんでいた。早くからハバーナ市内にごろごろしていた古手の豪邸に眼をつけ、そのひとつを買い取ってアパートにしたのもあの男だった。終夜つけ放しの二色のネオンサインはぼくの夢の中にまで入り込んできて、夢に出てくる市電はどれもこれも青くなったり赤くなったりした——もっとも、これは真夜中のもうひとつの世界の出来事だが、夜のハバーナの大きな楽しみはもっと早い時間から始まっていた。その頃の流行で、路上にテーブルを並べたカフェでは女性ばかりの楽団がにぎやかに演奏し（アパートの角を曲がるとブラード遊歩道に出るが、そのあたりのカフェに出演している楽団のメンバーは女性ばかりで、あたりにいかにも華やいだ雰囲気を添えていた。もっとも、ぼくはどういうわけか女性がサキソフォンを吹いているのを見ると、不安な気持になってつい吹き出してしまうのだ）、町はまばゆいばかりの光で輝いていた。投光器、灯台、電灯、反射灯、ネオンサイン、それらが町を真昼のように明るく照らし出していて、田舎町からやってきたばかりのぼくには珍しくて仕方なかった。田舎町の祖父母の家はレアル街にあったが、街路の角々に取りつけられたうす暗い灯火は支柱のまわりをぼんやり照らしているだけで、街角と街角の間はかえっ

て暗く感じられた。一方ハバーナは、実用的なものもあれば単なる装飾でしかない灯火もあったが、ともかくも町中が光で溢れていた。中でも、プラード遊歩道と海岸沿いの散歩道マレコンのあたりがとくに明るかった。街路を越えて岸壁まで届いている街灯の光は、その向うに打ち寄せている波のように街路をひたし、時折り走り抜ける車のヘッドライトがアスファルトの道路をまばゆく照らし出した。街路や歩道はもちろん、屋根の上にいたるまでハバーナの町はまぶしいまでに光り輝き、その光の魔術によって取るに足らないものまでが美しく煌めくかと思えば、時には古寂た光沢を帯びて舞台装置のようにくっきりと浮かび上がることもあった。昼間みるとぞっとするほど俗悪な建物でさえ、まるで宮殿のように美しく光り輝いて見えるのだ。昼の世界はまた趣きを異にする。広々とした並木道はどこまでも続き、陽差しも田舎町よりはやさしく感じられた。田舎町では太陽の光が街路の白い粘土質の土の上にカッと照りつけ、耐え難いほど強い光となって照り返してくるが、ハバーナでは黒いアスファルトの舗装道路が太陽の光を吸収し、高い建物の影や海から吹き寄せる風のせいで陽差しがずっと和らげられていた。近くを流れるメキシコ湾流から生まれた風が熱帯の夏に涼風をもたらし、田舎町に住んでいた頃には考えもつかなかったことだが、この分ならひょっとすると冬の訪れもあるのではないかと思えたほどだった。ぼくたちは狭い一室で暮らしていたが、その息苦しさをハバーナの町の広々とした光景が救ってくれた。しかし考えてみれば、田舎町にいた頃は、どんなに貧しくても一軒のちゃんとした家があったのだ。それはともかく、おふくろは仕切りにカーテンを使えばいいということに気づかず、ドアを閉めきったままにしていた。おかげでぼくたちの足は自然に外に向って開かれた唯一の場所であるバルコニーのほうに向うことになった。じつを言うと、ぼくはバルコニーが恐ろしかった。というのも、ぼくの記憶にあるおふくろはいつもそうだが（たとえば、なにかの拍子に弟が白いズボンを汚したりするという）、ちょっとした出来事がもとで、家の中で口論がもち上がる。すると急にかっとなって、こんなことならいっそいっそ自殺でもしたほうがましだと言い出すのだが、こちらに引っ越してからはそれがいっそう具体的な形を取るようになり、「そのバルコニーから身を投げて、死んでやるわ！」とわめき立てるようになったのだ。しかし、ぼくが書こうと思っているのは気の滅入るような生活の陰画（このおかげで、やがてぼくは一度ならず自分の幸福について形而上学的な考察を行なうようになったのだが）ではなくて、もっと楽しい陽画のほうなのだ。ぼくの思春期、バロック風の手すりのついた染みひとつない大理石の螺旋階段を昇っている時に始まったぼくの思春期、その中に秘められたほんの一握りの陽画、それを物語ることにしよう。

ぼくがハバーナで最初に知り合ったのはまことに奇態な

人物だった。おやじがぼくたちをその人物に引き合わせてくれたのだが、そのやり方からして一風変っていた。おやじに言わせるとその男はじつに風変りな人物で、「なにしろ大した男だ」とのことだったが、それだけではどんな人物か見当もつかなかった。ハバーナに出てきて数日後にその男と会うことになったのだが、待ち合わせの場所というのがまたふるっていた。当時はまだ名前も知らなかったブレシオス・フィッホス（とアギラ、レイナ、エストレーリャ）の角のところまで行き、そこで相手を待つことにしたが、来る相手というのがじつを言うと人間ではなくて、一台の乗物、つまりバスだったのである。すっかりハバーナにかぶれていたおやじはバスのことをグアグアと発音していたが、ぼくたちもいつの間にかバスのことをグアグアと呼ぶようになった（中庭のある立派な建物で研究している言語学者の中には、グアグアはインディオ起源の言葉であるという人もいるが、梅毒持ちのシボネイ族や身体障害者のタイノ族の者たちがコロンブス発見前に乗物にのって旅行していたとは考えられない。それに、彼らは当時車輪というものを知らなかったのである。今世紀の始まる前後にアメリカがキューバを占領したことがあるが、この単語はその頃に生まれたものにちがいない。当時はラバに引かせる最初の乗合馬車が誕生したばかりだったが、それをアメリカ風にワゴンズと呼んだのだろう。このワゴンズがハバーナでグアゴンスと訛り、それがインディオの使っていた言葉グアグアと結びついたと考えられる。これはけっしてこじつけではない。この名詞が女性形になっているのは、語尾がアで終わっていることもあるが、英語の乗物を指す単語がすべて女性形であることとも関係している。チリやペルー、エクアドルでは赤ん坊のことをグアグアと言うが、キューバの人間がたとえばチリの本を開いて、「彼はグアグアを川から拾い上げると、両腕で抱えあげた」という一文に出くわしたら、シュルレアリストの書いた文章を読んだように腹を抱えて笑い転げることだろう――バスを川から拾いあげて両腕で高々と差し上げることができるのは、ヘラクレスかアトラスくらいのものである）。ぼくたちはバスが来るのを待ったが、バスなら何でもいいというわけではなかった。二十三系統のバスで、その車体番号はおやじだけが知っていた。しばらくするとお目当てのバスがやってきた。それを見ておやじは止まるように合図したが、その格好ときたら軍隊式の敬礼とおっかないナチ風の敬礼をごっちゃにしたようなもので、とても見られたものではなかった。雨かどうかを確かめるように手を前に突き出したあの姿だけはいまだに忘れることができない。（バス、女性形のグアグアがそのまま止まらずに行ってしまうと思ったのか、いつになくうろたえた）おやじが断固とした態度で手をあげたので、ひどく込み合ったけばけばしい色のバスがようやく止まり、ぼくたちはそのバスに乗り込んだ。おやじが引き合わせようとしたのはそのバスの車掌、ハバ

ーナではふつうグアグェーニョと呼ばれている切符切りだった。人からあまり羨まれることのないこの職業につくと、人生観から態度物腰、しゃべり方にいたるまで一種独特の心理的陰影を帯びるようになると言われている。ハバーナ社会は厳しく区分けされた階層から成り立っているが、バスの車掌という職業は言うまでもなく上の方に位置してはいない。もちろん当時のぼくにそんなことが分るはずもなく、まるでお辞儀でもするように頭のてっぺんから爪先までその姿を眺め、英雄でも見るように彼をふり仰いだのだった。そう言えばおやじとは対照的に背が高く、金髪で青い眼をしたその男はどこかスカンディナヴィアの英雄を思わせた。おやじから、この人がエロイ・サントスだと言われた時は、なるほどぴったりした名だなと思った。エロイ・サントスはぼくたちを大歓迎してくれたが、とくにおふくろの姿を見た時は嬉しそうだった。もちろん、ぼくたちはバス料金を払わなかった（そんなふうにバス会社の金をしごく鷹揚に扱っていたせいで、やがてエロイ・サントスは会社を馘になった。彼はしょっちゅう乗客の数をごまかしては、五センターボずつポケットに入れていたが、自己正当化のために「資本家から盗むのは／社会正義である」という自作の詩をちゃんと用意していた。資本家や企業からかすめとった金を貧しい人に施したり、自分が頂戴していたわけだが、彼に言わせると、これこそバスに乗ったロビン・フッドにふさわしい行為なのである）。おやじやおふくろと同様、エロイ・サントスも当時はまだ非公認だった共産党の創設者のひとりだったが、彼はそれ以前にハバーナですでに党員になっていた。海軍の軍曹だった頃に、（机上論では）航行中の船の上で叛乱を起こそうと計画し、それを党の機関に諮ったことがある。いま机上論ではと書いたが、当時は航行できる戦艦は数えるほどしかなく、しかもせっかく海軍で学んだ理論も海上で実践に移す機会はほとんどなかったのである。エロイ・サントスの計画では、まず船の指揮権を奪い取り、カサブランカ埠頭から船を出して、港の狭い入口に横付けする。そして、二、三丁場（ノットとか海里という言葉は出てこなかった）船を進めたところで船首をマレコンに向けて船を停め、そこで、大砲の照準を大統領官邸に合わせて、独裁者が降伏するか逃走するまで、砲撃を加えるというものであった。要するにあの計画は、ロシア革命における神話的な事件、すなわち戦艦ポチョムキンと巡洋艦オーロラ号の叛乱を下敷にして作り上げたものだった。ニコライ二世を六割、そこにケレンスキーを四割加えてやると独裁者マチャードができ上がる、というのが彼の口癖だった。しかし、あの叛乱計画は銃撃戦をともなう形で実行に移されなかった。（その頃、マチャードと政治協定を結ぼうとしていた）党は、いかなる〈軽挙妄動〉（これが党の言葉かエロイ・サントスのものかははっきりしないが）をも慎むようにと彼に厳命した。エロイ・サントスは断固叛乱を起こすべしと主張したが、

結局それがもとでマチャードが亡命すると、たちまち不遇をかこつ身となった。もっとも、彼はそのことで精神的に支えられていたところもあったのだが、いずれにしても、（その理由は言わなかったが）彼は海軍を除隊し、政治の世界から身を引くことになった。しかし、今でも彼が共産主義者であることには変りない（おそらく死ぬまでそれは変らないだろう。彼の場合は共産主義者というよりもむしろ度しがたいロシアびいきと呼んだ方がいいのかも知れない。それから何年かすると、ぼくを摑まえて、社会主義リアリズムのもっとも正統的な作品だけはぜひ読んでおくべきだと言った。彼がしつこく言うので、気を悪くさせてはいけないと思って『昼となく夜となく』というなんともひどい出来のソヴィエトの小説を読んでみたが、あれにはうんざりさせられた。彼はまたわざわざ写真を引っぱり出してきて、スターリン時代の建築はすばらしいだろう、それに較べるとキューバのコロニアル風の建築ときたら頽廃的もいいところだと悪しざまに罵り、言うほどに興奮しはじめて、スターリン時代の高層建築をひどく持ち上げたので、ぼくはそんなことはないときっぱり言ってやった。キューバの建築物は頽廃的というよりもむしろ倒壊寸前だったのだ。一九四四年にキューバを襲ったサイクロンは、ハバーナ旧市街にあった美しい宮殿のひとつを倒壊させたが、その時に彼は「ソ連ではこんなことはないんだがなあ」と慨嘆した。謎めいたその言葉が果たして建物のことを指しているのか、それともサイクロンのことを言っているのかはとうとう分らずじまいだった）。現在の政治的地位となると、はっきりしたことは言えない。共産党の父と言われる人たちのことなら、その洗礼名から誰と誰が政治的に近しいかということまで知っているが、本人はまだ彼らのように殿堂入りを果たしてはいない。書記長のブラス・ローカと言えば泣く子も黙るほど有名な男だが、その男もエロイ・サントスにかかると、ああ、あの風采の上がらんバーコ・カルデリーオか、ということになる。このエロイ・サントスはおやじにとってかけがえのない友人で、根っからのハバーナっ子だった（生粋のハバーナっ子特有の彼のしゃべり方は、ぼくが聞いた中でもいちばんユーモラスなもので、ふざけて喋っているとしか思えなかった）。その時に彼はいろいろな話を語って聞かせてくれたが、今ではそれらが伝説として語り伝えられている。ぼくたちは彼といっしょにアギラ、レイナ、エストレーリャを経て終点のエル・ベダードまで、つまり二十三系統の路線を端から端までバスに揺られて行った。あの時、おやじとおふくろがエロイ・サントスを相手にどんな話をしていたのか少しも憶えていない。というのも、ぼくはバスの両側を通り過ぎて行く石造りの建物を見るのに忙しくて、三人の会話に耳を傾けるどころではなかったのだ。ぼくの記憶違いでなければ、あの時はたしか終点のエル・ベダードまでは行かず、途中のマセオ公園でエロイ・サントスを残してバスを降り

たように思う。エロイ・サントスのほうはそのままバスに乗って、何かと忙しい車掌の仕事を続けたが、おそらく終点に着くまで乗客の数をかぞえる計数器をできるだけごまかし、思いがけないところから乗り込んでくる監察官に乗客の正確な数をつかませまいとして躍起になっていたにちがいない。その日の午後、というよりももう夜に近かったが、その時刻にぼくたちは彼と連れ立って散歩した。並んで歩くとそう背は高くなかったが、話のほうはじつに面白かった。マレコンを抜けてマセオ公園のあたりまで足を伸ばしたが、その間に彼はいろいろな話をしてくれた。その日、エロイ・サントスはおふくろを摑まえて（あとで思い返してみると、どうやらあれはぼくに向って話していたらしい）、自分がどうやって死の世界から舞い戻ってきたかを詳しく話していた。彼にはいい子（ハバーナでは自分の恋人のことをそんなふうに呼ぶが、ぼくがその言葉を聞いたのはそれが初めてだった）がいたが、じつを言うとその女性は娼婦だった（当時のぼくには、この娼婦という言葉の意味がよく分らなかった。エロイ・サントスは下品な言葉を使わざるを得なくなるといつも婉曲な表現を用いたが、そういう微妙な話になって、彼が自分の言葉にひどく気をつかったのはあれが最初だったように思う。男色という聞きなれない言葉を耳にしたのも、たしかあの時が初めてだった。彼は貴族階級の人間を悪しざまに罵り、「貴族というのはどいつもこいつも腐敗、堕落しているんだよ。たとえば、バイロン卿がそうだが、あの男は男色家だったんだ」ぼくは家に帰るとさっそく辞書を引いて男色家の意味を調べたが、バイロン卿の方はエロイ・サントスが「ロール・ビリオンがそうだが、あの男は男色家だったんだ」と発音したので、調べるのにひと苦労したのを憶えている）。「あの子にはとんでもないお土産をもらってね」とエロイ・サントスは言ったが、お土産をもらうというのがハバーナの隠語で性病をうつされることだと分ったのは、それから何年ものちのことである。そうした言葉よりも、あの時彼が話してくれた信じられないような話のほうがはるかにつよく印象に残っている。エロイ・サントスは梅毒にかかったと分って、慌てて医者のところに駆けつけたが、病気は思いのほか進行していてすでに手遅れだった。「第四期に入っていてね」と彼は言ったが、ぼくにはなんのことか分らなかった。医者はなんとか治療しようといろいろ手を尽したが、サルバルサンを投薬しても治癒の望みはなかった。「で、おれは死んじまったってわけだ」彼はそうあっさり言ってのけたが、現に眼の前で喋っている人間が死んだというのはどういうことなんだろうと不思議に思って、ぼくはじっと耳を澄ました。彼の遺体は〈ジャガイモ置場〉（つまり、病室の横にある死体安置所、もしくは死体置場のことだが）に運ばれたが、よほど運がよかったとみえて、たまたま医者の卵のインターンがそこを通りかかり、エロイ・サントスの遺体を覆っているシーツの端から、身

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.